

【学位論文審査の要旨】

本論文は、地域の小、中学校において、慢性疾患がある子どもへの復学支援の経験を持ち、また自らの経験を語ることができる 8 名の養護教諭を研究参加者として、養護教諭が子ども達に対してどのような復学支援を行っているのかを、半構成的面接法によるインタビューを行い、Leininger の民族看護学の方法を参考に分析し、記述した質的記述的研究である。

近年、医療技術の進歩により慢性疾患がある子どもは、入院生活を経た後、継続的に外来で治療を受けながら社会生活を送ることが出来るようになった。入院中、病院内にある院内学級や特別支援学校に学籍を移していた子ども達が、退院後再び元の学校に戻る際の復学支援は重要である。しかし、医療機関と学校が連携する復学支援には様々な課題があり、学校において子ども達の健康面の管理を担う養護教諭に慢性疾患の子どもへの対応は託されている現状がある。本研究では、こうした現状の中で、教育現場で優れた復学支援を行っている経験豊富な養護教諭自身の語りを通して、慢性疾患がある子どもの入院中から復学後にかけての対応を詳細に記述したところに実践的、学術的意義がある。

結果として、慢性疾患がある子どもがスムーズに復学し、安心して学校生活を送るために、養護教諭は自らを健康管理の専門家であるコーディネーターと位置づけ、入院中から復学後も一貫して、子どもと学校内の教員・子ども達をつなげ、必要に応じて病院と学校をもつなげる「つながりをつくる」支援を行っていた。また、復学後の子どもの体調を「みまもりながら、待つ」支援は、子どもの不安や焦りをすべて受け入れる姿勢の養護教諭と、学校生活の中で「がんばりたい」という希望を持つ子どもとの間の信頼関係の上に成立し、養護教諭は「みまもりながら」子どもが病気と向き合う力を育んでいることが示された。また、慢性疾患の子どもが学校社会の中でみんなと一緒に生きていくために、そして慢性疾患の子どもに限らず学校のすべての子ども達が自分自身を主役だと感じて生きていくために、どのような支援が必要かを常に判断し、行動している養護教諭の姿が記述された。本研究の成果は、慢性疾患がある子どもが増加し、退院後の子ども達の学校生活に関連して、医療者と学校関係者の連携がさらに求められる中で、医療者と養護教諭との連携に具体的な示唆を与えるものであると言える。

審査における主な質疑は、①研究参加者として養護教諭 8 名を選択した根拠、また研究参加者に関する記述が「経験豊富な養護教諭」から「熟練養護教諭」に変わった理由、②研究目的の表記の不統一と「記述する」ことの意味、③Leininger の民族看護学の方法を参考にした分析における個別性、共通性の捉え方、導き出されたテーマとの関係、④今後の実践、および看護学への貢献、などであった。これらの指摘や質問に対し、申請者から具体的な例を示した適切で妥当な回答や発言がなされた。また、慢性疾患のある子どもの復学支援に取り組む養護教諭に関する研究に長年取り組んできた申請者のこの領域における専門的知識の深さ、子どもや家族、養護教諭に対する思い、研究に取り組む真摯な姿勢が示された。さらに、本研究での課題をもとに、新たな研究に取り組んでいくという研究意

博士学位論文審査の要旨

欲が示された。

以上のことから、本研究が博士学位論文としてふさわしい水準にあると認め、申請者が博士（看護学）の学位に相当するものと判断した。